

大空に映える

まなびの大地

大森小

June 2026

学校だより

水無月の章

すんでみたいな このまちに

校長 今 将史

朝の立哨をしながら考えたこと

私の住んでいる居住地から、子供たちの声が消えて何年も経ちます。過疎化・高齢化が進み、地域に子供自体がないのです。一方、本校に出勤し校門付近で立哨すると、何百人もの子供たちを迎えることになります。挨拶を交わし学校に迎え入れながら、この子供たちは将来もここに住み続けるだろうかと考えることがあります。というのも、首都圏や県都も含め、宅地造成を進めてきた地域が、子供たちが巣立っていくと同時に人口が減り、廃れていった報道等をよく目にするからです。

多様な関わり合いが生み出すもの

学校も含め、自分たちが生活するエリアが心温かな関わり合いで満たされ、自分らしさを発揮できる安全な場所であれば、街は姿を変えながらも維持されていくものと考えます。そうした未来への期待を感じさせる幾つかの例を紹介します。

👉 大森小学校区には、たくさんの見守り隊の方たちやパトロールの方たち、保護者の方たちが、朝の登校を見届けながら、本校の子供たちに優しく声をかけてくださいます。

👉 P T A 学校委員の方々をはじめ保護者の方々が積極的に運動会や学年行事を支援してくださっています。ボランティアサークル「ぶ〜け」の方たちの読み聞かせに、子供たちの笑顔がこぼれます。できるときにできる範囲で学習等を支援する「おおもりサポーター」に登録してくださった保護者・地域の方も増えています。

👉 そうしたご支援と本校職員の様々な試みの甲斐もあり、「Q-U」という心の在り様を客観的・分析的に測る調査では、学校生活を意欲的に送っている児童の割合が大変高くなっています。

保護者の方や地域の方が、楽しみながら自分たちのためにあれこれ世話を焼いてくださる姿は、子供たちにとって良きモデルとなります。本校では、これからも様々な方たちと手を携えながら、この地域・学校が「心のふるさと・よりどころ」となり、『すんでみたい・もどってみたいコミュニティ・エリア』であり続けるための準備を進めています。